AMCWA 会報

NPO法人 アジア母子福祉協会
東京都品川区西五反田２丁目１５番７号
ジブラルタ生命五反田ビル３F-ITL
mail：tokyo@amcwa.org　tel：03-6424-5681

石原晃君を偲ぶ

構想力と実行力の賜物

アジア母子福祉協会 理事長　山口洋一

石原晃君との出会いは私が駐マダガスカル大使をしていた1986～89年の時代であるから、今から30年以上もの昔に遡る。当時、彼はJICAがマダガスカルに派遣していた5名からなる漁業協力チームの責任者であった。このチームは漁労、流通、加工などの専門家で構成され、彼はその全体を統括するチームリーダだったのである。彼の名前はその当時、古矢晃だったので、今でも私には「古矢君」の方が馴染みがある。

マダガスカルの首都アンタナナリボは島の中央高地に所在するため、首都の住民は海の幸とは全く無縁の暮らしをしていた。魚と言えば、ごく限られた川魚しか知らなかった。海辺は遠く離れ、道路事情も劣悪だったため、海産物が首都に届くことは絶無だったのである。

この状況を打開すべく、古矢君は悪戦苦闘した。首都に冷凍・冷蔵庫を設置しなければならなかったが、彼はまず鉄製の古いコンテナ数個を並べて、これを冷凍・冷蔵庫に改造した。こうして海産物を首都の住民に食べさせる彼の努力は徐々にその成果を発揮し、今ではタナに海産魚を売る魚屋が軒を並べるようになったのである。JICAの協力プロジェクトが住民の生活様式までも変化させた成功例は、他に類例を見ないと言っても過言ではない。まさに古矢君の構想力と実行力の賜物である。

その後、私が駐トルコ大使や駐ミャンマー大使をしていた時分には、彼との親交も遠のいていたが、退官後、現に私どもが手掛けているNPOアジア母子福祉協会には、彼が役員として参加し、積極的に活動してくれていた。彼のお陰で、この団体の活動領域にマダガスカルが加わり、このNPOを大いに活性化してくれた。彼は毎年数回、マダガスカルに赴き、多彩な事業に携わったが、特に桜の植林には力を入れていた。タナやその近郊に桜並木を見ることができ、お花見をすることができるようになったのは、実に彼の功績なのである。

日本大使館前の桜並木

兎も角、彼のマダガスカルに対する思い入れは深く、マダガスカルについては、日本における押しも押されもせぬ第一人者となっていたことは疑いない。

実に惜しい人物を失った。故人のご冥福を心から祈りたい。

マダガスカルを心から愛した石原さん

アジア母子福祉協会 常務理事　大谷光弘

1980年代のマダガスカルで石原さんはJICAの専門家として、多くの人が実現を信じなかった海洋漁業開発を成功させ、冷凍海産物の国内流通及び販売網、近隣国への輸出体制構築を主導したのです。四方を海に囲まれながら、殆ど活用されていなかった海洋水産資源を貴重な蛋白源として国民に提供し、同時に多くの雇用機会の創出や、慢性的に不足していた外貨の獲得という偉業を成し遂げたのです。

そして概ね20年後、在マダガスカル日本大使館勤務の際に、期待通り発展していた水産業の更なる成長のためには「海の恋人」と呼ばれ始めた森林の育成が、また貴重な固有種動植物の保護のためにも、マダガスカルにおいて自然林復原の必要性を痛切に感じたのです。石原さんは大使館勤務の激務の中でAMCWAと協力、2008年から植林活動を開始しました。2009年から中央高地一帯に植えた桜は、春になると満開の美しい花を咲かせ、「サクラ」の名称で人々に親しまれるようになっています。2011年から開始したアンバトランピ市の児童養護施設への文房具・衣類・食料などの継続的支援を契機に、敷地内で苗木育成や植林を行うこととなり、子供たちに植林の重要性を説明し、手を取って接ぎ木を教えました。

植林は成果が目に見えるまでに、長い年月と膨大な労力を必要とする地道な活動です。特にマダガスカルに植えられている樹木の内で大きなシェアを占めながら、固有動植物と共生できないユーカリを引き抜いて固有樹種に植え替える作業は、多くの人々の支持と協力を必要とします。マダガスカルを誰よりも愛した石原さんはマダガスカルでしか見ることのできない固有種の森林を作り、そこで生活する固有種の動物を見るのを夢見て活動を続けて来たのです。

苗床用の土を準備する石原さん

本当にご苦労様でした。 心からご冥福をお祈り申し上げます

石原さんの遺志を次いで

アジア母子福祉協会 会員　濱口　光

2009年1月、在マダガスカル日本大使館で行われたレセプションでの故石原氏との出会いが、私とマダガスカルを今も繋げるきっかけでした。

当時、青年海外協力隊として赴任して間もない私は、マダガスカル水産業についてまったくの無知でした。そんな私に対し、マダガスカルの水産業、日本とマダガスカルの水産協力の歴史を教わるところから始まり、今のAMCWAで行う植林事業まで続いてきました。

マダガスカルは、1980年ごろから日本が水産協力を継続してきている国であり、その立役者となったのは故石原氏（旧姓：古矢の名で知られている人が多いと思う）は、当時のマダガスカルの水産業を知る人であれば周知の事実であり、今もその名残がマダガスカルの各所で見られます。

多くのことを教わる中で、石原氏と共に仕事をしてきた現地の人々との繋がりも引き継がせてもらいました。さらに、その中で国際協力に対する考えやマダガスカルの人々に対する思いに感化され、協力隊終了後も故石原氏とマダガスカルを中心に活動を続けていました。

これまで共に行ってきた活動は、漁業振興だけに留まらず、大きく分ければ児童養護施設支援、母子医療支援、そして急逝する直前まで行われていた植林事業（環境保護）がありました。

水産出身者がなぜ植林活動をおこなうのか？という疑問を、活動中多くの方から聞かれましたが、石原氏が関わったマダガスカルの漁村では「漁業をするなら植林をしろ」という一種の格言があり、植林をしない者には漁業をする資格もないという人までいました。似たような考え方は、日本の地方や世界のいくつかの漁村でも見られます。現在は、母子の栄養改善、児童養護施設の継続的な栄養の供給を目的とした植林事業を私が引き継いで継続しています。

多くのことを学ぶことから始まり、共に活動をしていく中で、故石原氏はただの恩師というだけでなく、父とも呼べるような存在でした。

知識や技術では、まだまだ発展途上ではありますが、マダガスカルに対する思いや意思は誰よりも引き継いでいると自負しており、今後もマダガスカルの発展に協力していけたらと思います。

石原さんーマダガスカルでのことなど

アジア母子福祉協会　会員
日本・マダガスカル協会事務局（大豊建設）原田新二

初めて石原さんにお会いしたのは1989年6月、マダガスカルの首都アンタナナリブでした。当時石原さんは水産専門家の草分けとしてマダガスカルで奮闘中でした。「赴任してからこのかた1日も休んだことがありません」と言っていましたが、それが誇張でも何でもなかったことはその後長い間石原さんの行いを見てきて、今更ながら納得しています。

この時の出会いは一瞬でしたが、2008年11月頃、石原さんが在マダガスカル日本国大使館営繕担当者として赴任されてからは、当時マダガスカルに駐在していた私は石原さんとしょっちゅうお会いするようになりました。この時から石原さんとのかかわりが深くなり、その後その生き様を垣間見ることができるようになりました。大使館内では営繕担当としての業務を超え、菜園整備や大使公邸中庭の整備など次々とアイデアを出しては実践しておられましたが、それに加え当時からすでに、以前の水産専門家時代のマダガスカル人の知人・弟子らとともにアンブヒジャーノ村等での桜などの植林を土日を利用して行っていました。当時の大使が「あんな人は他にいないよ」と言っていたのは大使館内での業務のことだけを言っているのではなかったと思います。

石原さんをぐっと身近に感じるようになったのは二人でしょっちゅう囲碁を打っていたからです。石原さんの宿を訪ねては下手の横好き同士で日がな一日何局も打ちました。

2011年世界大会に来日した囲碁チャンピョンと

石原さんが帰任後、時々囲碁の新聞を送ってくれましたが、メモ書きに「（この新聞を）読んで理解しているわけではありません。理解していたらもう少し強くなっている」とあり、吹き出しました。

石原さんは日本・マダガスカル協会の理事もやっておられましたが、わたしが2015年から同協会事務局員として関わりだしてからは、同協会の活動・運営についていつも石原さんのアドバイス・協力を仰ぎ、おんぶにだっこ状態でした。それでも「最近この協会もようやくマシになってきた」と言われたときは嬉しくもあり、また、人としての生き方を見せてくれている石原さんの背中がまだまだ遠いとも感じました。

昔話でヤマハ時代の話や水産専門家時代の話などを語るともなしに口にされることがありましたが、自分のことより周りの人々のことを優先して考え行動する昔からの変わらぬ姿勢に感心したものです。「マダガスカルに恩返しする」と力みなく言い続け、その通りに実践されました。有言実行、本当に見事でした。

石原元専務理事とアンバトランピの桜

アジア母子福祉協会 会員　浜部めぐみ

石原さんに出会ったのは2009年。私がJICA青年海外協力隊としてマダガスカルのアンバトランピに赴任した年でした。第一印象は、マダガスカル人っぽい、目の大きい顔の濃いオジサマ。当時、在マダガスカル日本大使館にお勤めでしたが、そんな堅気な雰囲気は一切なく、とても気さくなオジサマでした。

たまたま、私が赴任していたアンバトランピに、親を殉職で亡くした子の警察孤児院があり、その施設長と私が顔見知りで、石原さんがその施設に興味を持ってくださったことで、現在も続いているAMCWAのマダガスカル支援につながるとは、ご縁と申し上げるのがよいのか、人知を超えた不思議なつながりを感謝しています。

まるでサンタクロースのように警察孤児院に年に一度くらいはとクリスマスにおいしい食材を届けてくださったり、花咲か爺さんのように桜の木の植林や手入れの技術を子供たちに教えてくれたり、ちょっと心温まるような面白いことを、いつも自分で見つけては率先して行動する方で、次は何をしてくれるのかな？という何か目が離せない面白いおじさんでした。

時々、毒舌で厳しいご意見を言う方でしたが、それも、マダガスカル人とマダガスカルという地を誰よりも好きだからで、結局、彼らにとって良い発展、成長につながることであればよし、そうでないなら素直に物申す、怖いものなしの無敵の年金生活者（ご本人がそう言っていました）でした。マダガスカル支援では、時には、資金の調達や進まない計画など、決して順風でない時もあったかと思いますが、でも、やりたいと思ったら何度でもチャレンジする、継続する、その姿に、やりたいことを追いかけていると、人生、意外とやりたいことはできるものなのだと思わされました。

「いつも10年先を見て動きなさい」「人生10万円きってからが勝負よ」「状況が変われば発言も変わるのだ」等、人生の先輩であるからか、石原語録は、いつも妙な説得力と思わずクスっと笑ってしまうフレーズで、落ち込んでいる日は元気を頂きました。今この瞬間の状況に目を向けるのではなく、もっと先、広い視野で物事をみることで、今日の悩みも小さく見え、見るべきことに焦点を当てるよう教えてくださったのかもしれません。

私の任地をご贔屓に支援してくださった感謝、人として一つの生き方を教えてくださった感謝、等々、石原さんに伝えそびれてしまった感謝がたくさんあります。生前、「いつか来なければならない場所です」と言われておりますので、いつか、それこそ10年先かもしれませんが、アンバトランピの桜が満開の日に、お花見に行こうと願っております。

父の思い出

阿部雅玖

父のマダガスカルとの関係は1975年以来、45年でした。マダガスカルでの事業に携わったのち、様々な国や地域を仕事で訪れた父でしたが、最後はマダガスカルで活動することを決めていました。45年もの月日が経っても、一つの国に情熱をもって携わり続けることが出来たのはすごいことだと思います。

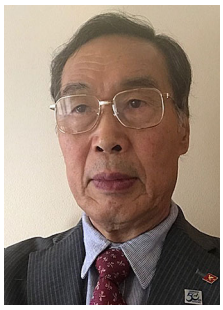
生前父は、日本と同じ島国で、インド洋上に位置するマダガスカルは、アジア的な要素もあり、非常に面白く、そしてこれからもっと発展する国だと言っていました。父は活動をするのであれば、誰もやった事のない活動でなければ意味がないと考え、マダガスカルの自然を守っていく為に、桜並木をはじめとする植林活動をすることにしました。父は、海外で活動する団体の中には、少なからず活動の目的がお金や名声を求めている団体が存在することに嫌悪感を抱いていました。その為、父の活動のモットーは、自分がお金を稼ぐためではなく、異国の地に、赤の他人が行って活動するのだから、その国が発展すること、現地の人たちの生活水準が少しでも良くなることが第一でした。そう言っていた父は、老人の老後の趣味と言いながら、自分の年金を持ち出してでも、マダガスカルの活動を継続できるよう頑張っていました。活動をしていくうえで、現地の人に技術的なことを教えたり、物資による支援により、少しでもマダガスカルや現地の人の生活に貢献できることが幸せだったのだと思います。

ここ数年はあと少しでマダガスカルでの活動を完結させると言っていました。まだ活動を続けたい思いはあっても、体力的に限界だったのだと思います。ただ限界の中でも、日本にいるよりマダガスカルへ行っている時の方が楽しいとよく言っていましたので、マダガスカルに行き活動ができることは楽しみで仕方なかったのだと思います。自分の信念を曲げず、最期までマダガスカルに携われたことは幸せだったと思いますし、父自身が人生に満足していたので、亡くなったことは残念ですが、親族一同父が幸せならよかったと考えています。

最後になりますが、山口理事長をはじめ、生前大変多くの方々にお世話になりましたことを、父 ・石原晃に代わりまして心から厚く御礼申し上げます。マダガスカルで桜の植林活動をしていた変わり者の日本人がいたと、少しでも皆様の記憶の片隅に留めておいていただけると幸いです。

ご挨拶

アジア母子福祉協会 常務理事　岡村大作



常務理事をお受けさせていただきました岡村大作です。本会との出会いは8年位前ジャーナリストの寺井様とのご縁でミャンマー視察旅行に参加致しました。私は千葉県で不動産建設業を営んでおります。仕事の広がりを求めての旅でした。ミャンマー政府の要職にある方々やNHKの不動産開発番組で紹介されていたサージパンさんとの出会い、その他にも多くの貴重な体験をさせていただきました。旅の中で山口理事長を始め多くの皆さんのお人柄に触れ感謝いっぱいの思い出があります。未だミャンマーでの仕事には至っていませんが本会のため少しでもお役に立てればと常務理事をお受けさせていただきました。よろしくお願い申し上げます。

アジア母子福祉協会 理事　森　恭弘

この度、熊田理事の後任として理事に就任させていただきました森でございます。
私は、昨年４月より熊田さんの後任として太陽生命の海外事業部を担当しております。
太陽生命はミャンマーへ2012年より駐在員を派遣し、2019年にミャンマー保険業界が外資開放されたのを機に現地生保に出資しＪＶを組んでおります。そのため、月1度程度ミャンマーに訪問させていただいておりました。（コロナが落ち着けば、訪問を再開します。）
当協会を通じて、ミャンマーに貢献できるように努力したいと思いますので、よろしくご指導の程お願いいたします。

アジア母子福祉協会 理事　大崎直美

正会員として3年目、AMCWAをご紹介いただいた山根さんの勧めもあり理事をお引き受けしました。さいたま市で三園、船橋市で一園の認可保育所を営んでおります。
ミャンマーとは観光開国前年の1995年に友人の実家を訪問してからです。現在はヤンゴン市内で日本語学校（60名）、北ヤンゴンで職業訓練学校（100名）を運営、これらの卒業生の日本受け入れ監理団体であるM&J協同組合の代表理事を務めております。何よりミャンマーの人々が好きで、ライフワークになりました。AMCWA活動の一端を担える栄誉を誇りに思います。どうぞよろしくお願い致します。

アジア母子福祉協会 理事　村木利雄

新たに理事に就任致しました村木です。宜しくお願い致します。AMCWAに参加することになった契機は、事務局長の柳澤さん(大学の同級生)に誘われたことです。ミャンマーには、アウンサン将軍と旧陸軍との縁、「ビルマの竪琴」、アウンサン・スーチー女史の活動などを通じて以前から関心がありました。数年前にミャンマーを訪れ、現地の人々の親日的で人柄の良さが強く印象に残り、何か助けになることができればと考えていました。財務省や銀行に勤めた経験も生かして，微力ながらAMCWAのために尽力したいと思っております。

★第21回定期総会開催
令和2年度定期総会を5月23日、オンラインで開催。平成31年度・令和元年度事業報告、同会計報告、同監査報告が承認され、令和2年度活動計画案、同予算案が原案通り採択されました。
また令和2・3年度役員が次のように選出されました。
理事長：山口洋一　副理事長：山根隆治
常務理事：大谷光弘、森本基、渡邉伸一、小池匠、岡村大作（新任）、柳澤信一郎　理事：岩崎亨、森恭弘(新任)、上村郁代、富田裕行、大崎直美(新任)、村木利雄(新任)、監事：寺井融、長野俊郎

★ウェブサイト刷新
AMCWAホームページ≪https://amcwa.org≫をマルチデバイス仕様でニューアル。ぜひご覧ください。
Facebook≪https://www.facebook.com/npo.amcwa≫と併せ情報を発信していきます。

★AMCWAメールマガジン
5月24日と8月4日に発信。配信ご希望の方はメールアドレスを≪tokyo@amcwa.org≫までお寄せ下さい。

故石原晃さんが社会貢献者表彰

マダガスカルでの永年の友好促進活動が評価され、故石原晃さんが(公財)社会貢献支援財団により社会貢献者に選ばれ、8月24日帝国ホテルの授賞式で安倍昭恵会長よりご遺族の阿部雅玖さんに表彰状と副賞が授与されました。
この表彰は社会と人々の安寧と幸福のために顕著な功績を挙げながら報われる機会の少なかった方々を対象に今回が54回目、1971年創立以来、表彰対象者は存命者でしたが、財団のご好意で物故者初の受賞者となりました。
照れ屋で目立つことや褒められることを嫌った石原さんも、受賞決定通知を受け取った時にはマダガスカルの活動が評価されたと大変喜んでいました。